

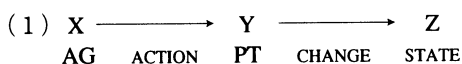
論 文

結果構文の類型に関する一考察 A Typological Study of Resultative Constructions

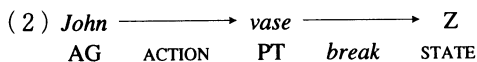
桐 生 和 幸

1. 動詞の種類と結果構文

他動詞の最も典型的なタイプの動詞は, *break* 「こわす」, *melt* 「溶かす」, *kill* 「殺す」などの動詞で, おおむね以下のような概念的イメージを持つと言える。



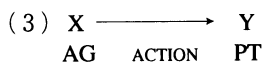
Xは, 動作主(AG)であり, Yは, 動作の対象(PT)である。そして, Yが動作をこうむった結果到達する結果状態をZが表している。例えば, *break* を例に取れば, XとYはそれぞれ主語と目的語であり, ZがBROKENという状態を表している。Zの部分は, 動詞の概念的な意味として動詞に組み込まれているものであり, 動詞の形から推測できるものである。これに基づけば, *John broke the vase.* は次のように表すことができる。



break という動詞は, CHANGEを表す動詞であり, どのように「壊す」という動作が実現されるか(ACTION)は, 未指定となっている。また, Zの部分については, その語彙概念で, (CAUSE(BROKEN))という意味を内包しており, Zに当たる部分は, この *broken* と連携している。Zの部分を具体的に *into pieces* の様な表現を付け加えることも可能である。

しかし, 動詞によっては, YからZへ向かう部分を持たないものもあり, 例えば, *hit* のような動詞は,

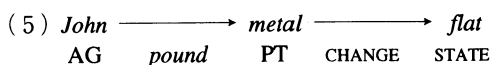
対象であるYへの働きかけのみ表し, その働きかけの結果どのような状態になるかまでは, 含意しない。よって, 同じような概念的イメージで表せば, 以下のようなようになる。



ところが, 言語によっては, このようなZへ及ぶ部分を持たない動詞でも, 明示的にZに当たる表現を付け加えることで, *break* と同じように, 動詞があらわす対象への働きかけの結果, 対象がどのような状態になるかを表して, 他動性の高い表現にすることが出来る。英語では, 結果構文(Resultative Construction)と呼ばれている構文がこれに当たる(Carrier & Randall, 1992; Levin & Rappaport Hovav, 1995; 影山, 1996)。例えば, (4a)のような例が結果構文であり, (4b)のような表現と意味的に等価である。

- (4) a. John pounded the metal flat.
b. John made the metal flat by pounding them.
c. John pounded the metal.

Pound という動詞は, *hit* と同じように働きかけしか表さない動詞であり, 結果はまったく含意しない。(4c)で *flat* を目的語の後に添えることで, 全体として(1)のような概念的イメージを持つことになり, 以下のように表すことが出来る。



言語によっては、結果状態を表す表現を付け加えることが出来ないものもある。例えば、日本語の場合を考えてみよう。

- (6) a.*ジョンは、その金属を平らに叩いた。
b. ジョンは、その金属を叩いて平らにした。

英文をそのまま直訳してみた(6a)は、日本語としては、たいへん奇異な印象を受ける文になってしまう。もし、(4a)の英文であらわされている内容を意味の通る日本語にしようとするれば、(6b)のように、ジョンの金属を叩くという動作を表す部分と金属を平らにするという働きかけをあらわす部分とを別の節であらわさなければならない。

もちろん、日本語においても、このような結果構文は、場合によっては可能なのである。

- (7) a. 太郎は、壁をペンキで赤く塗った。
b. Taro painted the wall red.

(7a)の日本語は、「太郎は、壁をペンキで塗って、赤くした。」という意味を表す。同じように、英語でも結果構文を使って表現することが出来る。

結果表現(RP)を取ることの出来る「塗る」とRPを取ることの出来ない「叩く」の違いは、前者が(1)のような概念イメージを持つのに対し、「叩く」が(3)のような概念イメージしか持たず、それ自体で結果を表していないという点にある。ところが、英語では、*pound*のような動詞にPRを付加することができるわけである。

このような日本語と英語の違いを、Washio (1997)、鷲尾 (1997) では、他動詞の結果構文のタイプをSTRONG Resultative(「強い」結果表現)、WEAK Resultative(「弱い」結果表現)という違いに求めている。¹⁾

(4a)のようなタイプの結果構文がSTRONG Resultativeで、英語では可能だが、日本語では、不可能なタイプである。また、(7)のようなタイプがWEAK Resultativeであり、日本語でも英語でも可能なタイプの結果構文である。

本論文では、3つの結果構文のうちSPURIOUS

Resultative 以外の2つの構文が言語間でどのように異なるかを、結果構文を広く捉え、考察を加えて行く。また、Washio (1997) では、英語、日本語、フランス語、イタリア語が考察の対象となっていたが、中国語、タイ語、ロシア語を加え、より広範囲の言語にわたって結果構文の類型を考え、Washio の言うSTRONG Resultative の中にも階層性が見られることを論じる。

2. 結果構文と言語類型

本稿では、以下のようなものを結果構文と考えて考察を進める。

(8) 結果構文：ある節が結果構文であれば、次の1aあるいは1bのどちらか、および、2を必要条件として満たしている。

1a. 主動詞が(1)のような概念イメージをとり、明示的にZが語彙的に節内に表されている。

1b. (1)の概念イメージを取り、ACTIONの部分、および、CHANGEまたはZの部分のどちらかが、あるいは、両方もが明示的に語彙的に節内に表されている。

2. 且つ、Y BE Z.とパラフレーズすることが可能である。

このような条件を満たす表現形式を結果構文と認めることとするが、実際は、各言語によって、仮にこの条件を満たしていても、言語独自の制約によって、結果構文を作ることが出来ない場合がある。このような差は、Washio (1997) で捉えられているような言語間の違いとして現れてくる。(8-1a)は、もともと動詞が語彙的に非明示的だったZを表現している場合で、WEAK Resultativeに相当する。それに対して、(8-1b)の方は、STRONG Resultativeに相当するが、Washioでは、基本的には、PRの方が付け加えられていると考えている。それに対し、本稿では、本来CHANGEを表す表現にACTIONが付加されているようなパターンも視野に入れることが出来る。もっとも、どちらにどちらが付加されているかどうかということは、それほど

重要なことではないし、「撃ち殺す」という日本語の複合動詞の場合、V₁とV₂のどちらが基本なのか決めることは出来ないであろう。

さて、Washio (1997) では、前節で見たように、結果構文を3つのタイプに分類している。Washio では、英語、日本語、フランス語が取り上げられていて、3つのタイプの結果構文と各言語における結果構文の関係が以下のようにまとめられている。

	English	Japanese	French
Transitive Resultatives	(a) (Spurious) ✓	✓	✓
	(b) Weak ✓	✓	?
	(c) Strong ✓	*	*
Intansitive Resultatives	(d) Strong ✓	*	*

結果表現と Washio が呼んで考察の対象としている文型は、英語やフランス語といった SVO 型の言語の場合、S V O AP のパターンを取る文型で、日本語のような SOV 型の言語の場合は、「撃ち殺す」のような複合動詞、及び、S O ATP V のパターンを取るものである。ATP は、Adjective-type phrase のことで、形容詞的な表現を指している。英語では、形容詞であり、日本語の場合は、伝統的な呼称を借りれば、形容詞(かわいい)、形容動詞(きれい)、名詞(生)がそれにあたる。

Washio は、自動詞と他動詞の区分をまず考えて、それぞれの動詞の中で、どのような結果構文が許されるかを考察している。他動詞では、WEAK Resultative を取ることのできる動詞は、AP/ATP の部分が動詞の意味から含意されるようなタイプのものと言える。上にあげた *paint* のような動詞の場合、動詞の表す動作によって、対象物に何らかの色がつくことが含意されている。日本語の「塗る」も同様のことが言える。

言語間の差異を見てみると、日本語及び英語では、(7)のように WEAK Resultative がほぼ自由に許される。しかし、Washio (1997) によれば、フランス語やイタリア語では、一般的に WEAK Resultative の容認性については、判断の揺れがあるらしい (p.28)。

- (10) a. *J'ai peint le mur rouge.
'I painted the wall red.'
b. Comment peindre le fond de ce dessin? Je le peindrais bleu.
- Moi je le mettrais jaune pâle.
'How would you paint the background of this drawing? I would paint it blue.
- I would set it pale yellow.'
(cited from Davau, 1949-1950)

(10a) からは、*peindre* O AP の形が容認されないことがわかるが、ある一定の文脈が与えられると、(10b) のように、*Je le peindrais bleu* がまったく問題のない文として扱われる。同じようなことが、Napoli (1992) において、イタリア語の場合も WEAK Resultative の解釈には揺れがあることを指摘している。少なくとも、フランス語やイタリア語のようなロマンス語系の言語では、結果構文の容認性は、高くないと言え、英語や日本語では、文脈なしに自由に使用が可能であると言いうことがわかる。

STRONG Resultative は、本来の述語動詞から、結果述語であらわされている状態が含意されないような場合である。(4a) の英語の例を取れば、チューリップに水をかけても、チューリップがベシヤンコになるということは *water* という動詞の意味からは含意されない。STRONG Resultative は、日本語やフランス語では、許されないようである。²⁾

- (11) a. John hammered the metal flat.
b. *Jean a martelé le métal plat. (French)
(Washio, 1997, 35)
c. *ジョンは、その金属を平らに叩いた。

次に、動詞が自動詞の場合の結果構文を考えてみよう。本来自動詞は、目的語を取ることをしないのであるが、結果構文のパターンを取れば、英語では容認可能な文となる。このようなタイプも STRONG Resultative の一つとして数えられる。Washio (1997) によれば、英語は、このタイプの STRONG Resultative を許すが、フランス語や日本語では、許容されない (p.27)。

- (12) a. He walked his legs off.
 b. *Il a marche le jambe raides.
 'He walked his legs off. (lit.,stiff)'
 c. 彼は、足をパンパンに歩いた。

以上のような STRONG Resultative と WEAK Resultative の分布を Washio (1997) は、'patienthood' という概念で説明しようとしている。日本語で可能な結果構文が、英語でも可能であるという事実から、Washio は、動詞との関連から、patient のタイプを4つに分けて、その patient のタイプと結果構文の分布とを結び付けている。Patient₁ は、自動詞が目的語を取った場合、Patient₂ は、他動詞の目的語で、目的語の変化までは含意しない動詞の目的語、Patient₃ は、ある種の変化を含意するが、実際にはその変化が起こるかまでは、含意しない場合。そして、Patient₄ は、変化を含意する動詞の目的語の場合である。そして、Patient₁ と Patient₂ は、動詞が変化を含意しないという点から同じグループにまとめ、また、Patient₃ と Patient₄ は、動詞が変化を含意するという点から、もう一つのグループに属するとしている。この2つのグループ分けから、英語の場合、結果構文の O は、Patient でなければならない、日本語の場合は、O が Patient₃ か Patient₄ でなければならないとしている。

しかし、中国語のような言語を見た場合、Washio (1997) の言う Patienthood の関係で英語では出来ないような結果構文が可能であったりする。さらに、動詞の目的語が動詞の下位範疇化で指定されているかどうかという点を Washio (1997) は考慮していない。その他の言語のデータを考慮すると単に Patient の種類を考えるだけでは、説明のつかない事実が浮かび上がってくるし、argument の下位範疇化ということも結果構文の分布に密接に結びついて言える。

以下の節では、中国語をはじめ、いくつかの言語でどのようなタイプの結果構文が可能なのかを概観し、動詞の下位範疇化の種類により、さらに細かい分類が可能であることを見る。

3. 中国語、タイ語、ロシア語の結果構文

ここで、Levin and Rappaport Hovav (1995) などのデータをもとに動詞の種類と、動詞の下位範疇化の種類から、結果構文を5つのパターンに分類してみよう。

(13) 結果構文のパターン

1. 下位範疇化された目的語を持つ他動詞の結果構文
2. 下位範疇化されていない目的語を持つ他動詞の結果構文
3. 非能格動詞のうち主語と目的語が同じ場合の結果構文
4. 非能格動詞のうち主語と目的語が同じでない場合の結果構文。
5. 非対格動詞の結果構文

英語では、Patient の意味的な種類による制限がなければ、上の5つのパターンは、全て可能である。

- (14) 1a. John broke the vase into pieces.
 1b. The gardener watered the tulips flat.
 (Jackendoff, 1990, 226)
2. The guests drank the teapot dry.
 (Levin, 1993, 100)
 3. Dora shouted herself hoarse.
 (Levin & Rappaport Hovav, 1995, 35)
 4. Belinda walked the soles off her shoes. (*ibid*)
 5. The river froze solid. (Levin, 1993, 100)

それぞれの例文の番号が、上の結果構文の番号と一致する。Washio (1997) の言う STRONG Resultative と WEAK Resultative の区別を採用すれば、1の例文の a,b がそれぞれ STRONG Resultative と Weak Resultative の例ということになる。また、Washio (1997) では、非対格動詞の結果構文(14-5)が取り上げられていなかったが、非対格動詞の結果構文は、日本語でも対応するものが可能なことから、Weak Resultative と考えることが出来る。

3.1 中国語の場合

中国語の結果構文は、見かけ上日本語の複合動詞のような形で、S-V₁ V₂-O という形を取り、STRONG

Resultative のタイプでも許す言語である。自動詞の STRONG Resultative も英語同様に非能格動詞で英語の *fake reflexive* のパターンと下位範疇化されていないパターンの両方が見うけられる。また、*fake reflexive* に当たる結果構文の場合、英語と異なり、再帰代名詞は取らない。³⁾

- (15) 1a. Ta xi-gangqing-le yifu.
he wash-clean-ASP cloth
'He washed his clothes clean.'
(Yong, 1997, 6-7)
- 1b. Zhangsan chui-ping-le tieban.
Zhangsan pound-flat-ASP iron.board
'Zhangsan pounded the metal flat.'
2. Keren he-gan-le chahu.
guest drink-dry-ASP teapot.
'The guests drank the teapot dry.'
3. Zhangsan he-zui-le.
Zhangsan drink-get.drunk-ASP
'Zhangsan drank himself into a stupor.'
4. Ta pao-ping-le xiegen
he run-flat-ASP shoe.heel
'He ran the heel of his shoes flat.'
5. Wanchu-de men huang-kai-le
cupboard-GEN door shake-open-ASP
'The cupboard shook open.'

これらの例から、中国語は、英語とほぼ同じような分布を示すと言える。しかし、中国語では、Washio (1997) が指摘するような Patient にならない目的語でも、結果構文に現れることが出来る。

- (16) Ta kan-huai-le dianshiji.
he watch-break-ASP TV
'*He watched the TV broken.'

英語では、Goldberg (1995) が指摘するように、動詞が表す行為の結果変化を受けるような argument でなければ、結果構文に現れることが出来ない。テレビは、見るだけでは普通、視線によって何らの影響も受けることがないので、見ることの結果壊れるとは考えにくい。ところが、中国語では、上の例で示されるように、*kan-huai* が、見た結果壊れるという出来事を表している。(16) があらわす意味は、「テレビを見ることによ

って壊した」と言うような意味になる。⁴⁾

では、中国語では、どうしてこのような表現が可能なのであろうか。これは、中国語の結果構文が、英語の場合と統語的にその構成が異なっているという理由に求められるといえる。中国語では、Yong (1997) によれば、 $V_1 V_2$ において V_1 が様態を表し、 V_2 が対象の結果を表すが、この形式においては、 V_2 の方に関心があるとしている。確かに、中国語の場合、*huai* 「壊れる・悪くなる」は、 V_2 としてその他の動作を表す動詞とともに現れ V_1 の動作で表される動作の結果「壊れる・悪くなる」という意味を生産的に作ることが出来る。また、目的語との位置関係を見ても V_2 の後ろに現れることから、目的語は V_2 の argument であって、 V_1 の argument とは言えない。実際、日本語の複合動詞と異なり、中国語の結果述語を表す複合動詞は、 V_1 と V_2 の間に否定語を入れるなどの他の要素をさしはさむことが可能である。しかし、アスペクトを表すマーカーは、 V_2 の後ろにしか来ることが出来ないで、全体として一つの構成素をなしているといえる。

よって、中国語では、 V_2 と目的語が統語的に直接結びついており、 V_1 はある種、様態をあらわす働きしか指定していないということが出来る。そのため、 V_2 の目的語として可能なものであれば、結果構文が容認される、ということになる。

それに対して英語の場合は、目的語は主動詞の目的語として働いていることから何らかの因果関係が必要であり、そこで、*affectedness* という概念が関係してくる。それゆえに、*affectedness* が感じられない状況では、結果構文が許されないことになると考えることが出来る。つまり、STRONG Resultative において、英語の場合は、(3) の概念イメージを持つ動詞に、Z に当たる PR を明示的に付加することで、(1) のようなイメージを持つ表現に構文的に派生しているのに対して、中国語の場合は、もともと (1) の動詞に ACTION に当たる表現を付加して、STRONG Resultative に当たる表現を得ているといえる。

Washio (1997) は、英語と日本語の結果構文の分

布の差異が SVO 対 SOV という語順の違いに起因するものではないと言うことを、英語と同じ語順を取る SVO 型のフランス語で、STRONG Resultative が許されないということを根拠にして述べ立てている。しかし、フランス語で STRONG Resultative が不可能だからと言って、日本語と英語の差異に語順がまったく無関係だと言うことにはならない。SOV 型の言語でも STRONG Resultative が可能な言語があれば、Washio (1997) の主張が正しいと見とめられるが、Washio は、その点については、一言も述べていない。現時点では、筆者自身も SOV 型の言語で STRONG Resultative が可能な言語を発見していないが、上の中国語の例を見る限り、語順もある程度関係があるということが示されているように思われる。この点については、中国語の複合動詞の統語的な特徴を調べて再検討する必要があるが、本論では、扱わない。

3.2 タイ語の場合

タイ語は、英語と同じく S-V-O-RP の語順を取る。(23) が示すように、タイ語では、他動詞の目的語で影響を与えるような意味を含意する動詞の場合、STRONG Resultative が許される。自動詞の場合は、WEAK Resultative は許されるが、STRONG Resultative は非文法的になる。⁵⁾

- (17) 1a. Joon chet jaan sa?-aat.
John wipe dish clean
'John wiped the dishes clean.'
- 1b. Chaag-lek tii lek baag
man-iron hit iron flat.
'The silversmith pounded the metal flat.'
- 2.*Joon duun kaa mot
John drink teapot empty
'Mary drank the teapot dry.'
3. ?Mary aj lom puaj.
Mary cough fall sick
'Mary coughed herself sick.'
- 4.*Jeen daen soon roo-*tau* lut.
Jane walk sole shoes remove
'Jane walked the soles off her shoes.'
5. kanom-pan hee kheey-pan
bread dry become.hard
'The bread dried hard.'

タイ語でも、RP に当たるものは、中国語とは異なり複合的な語順にならず、むしろ、連続動詞構文 (serial verb constructions) のような形式を取る。そのため、本動詞と目的語は、必ず、動詞が下位範疇化したものでなくてはならず、英語のように、下位範疇化されない目的語を取ることは出来ない。タイ語の場合、英語と異なり動詞が下位範疇化しない目的語を取る結果構文がなぜ不可能なのかは、タイ語の連続動詞構文の存在から説明が可能かもしれない。連続構文では、同じイベント内に現れる共通する項は、それぞれの述語動詞に共有され得る。一般的には、主語が共有されて、述語動詞が連なって行くのだが、共通項が目的語であった場合が結果構文であると考えることが出来る。実際のところ、過去のタイ語の研究では、結果構文も連続動詞構文の一つとして考えられているようである。

おもしろことに (17-3) の非能格動詞の場合、他の非文の例に比べて、容認度が高い。これは、主語がそれぞれの動詞の共通項として働くからであると考えられる。それに対して、2, 4の例は、目的語が V₁ の目的語としては、認可されない異質なものである。よって、V₁ の表すイベントと V₂ の表すイベントとが関連性がなくなってしまう、文法的な結果構文を形成することが出来ないといえる。⁶⁾

3.3 ロシア語の場合

ロシア語のデータは、全て出揃っていないのだが、面白いデータがあるので、考察に加えることにする。⁷⁾

ロシア語では、まず、WEAK Resultative の他動詞結果構文、非対格動詞の結果構文が可能である。

- (18) a. Ivan pokrasil dom v belyj
Ivan.NOM paint.PFV.PAST house.ACC into color
cvet
white
'Ivan painted the house white.'
- b. Ivan razbil vazu na kuski.
Ivan.NOM break.PFV vase.ACC to piece.ACC.PL
'Ivan broke the vase into pieces.'
- (19) Chelovek zamerz.
man.NOM freeze-PFV
'The man froze to death.'

ロシア語で他動詞の STRONG Resultative に当たるものは、打撃系の動詞の場合、英語のように ACTION と Z とが別々に表されず、両方の意味を含む単一の動詞で表されることが多い。

- (20) a. Ivan otkryl dver'
Ivan.NOM push.open.PFV.PAST door.ACC.SG
'Ivan pushed the door open.
b. Kuznec raspljushil metall
blacksmith.NOM pound.flat.PFV.PAST metal.ACC
'The blacksmith pounded the metal flat.'

ロシア語の場合、英語と異なり、行為を表す他動詞の中になりに強く結果を含意していて、さらに結果を表す表現を取ると意味的に重複してしまう。その意味で言うと Talmy (1985) の conflation という観点からして、ロシア語は、英語以上に Manner/Result の conflation が行われていると言える。

さらに、ロシア語では、非能格動詞の場合、動作の結果再帰的な形で何らかの影響を与えるという意味を表すことが出来る構文がある。これは、STRONG Resultative に該当する文である。

- (21) a. Ivan do-rabota'-sja do obmoroka
Ivan.NOM until-work-self till fainting
'Ivan worked until he got fainted.'
b. On za-gonjal lošad' (do smerti).
3SG.M.NOM ride.PAST horse.ACC till death.GEN
'He rode the horse to death.'
(Kulikov & Sumbatova, 1993, 334)

動詞に do- または, za- という接辞がつくことによって、形式的にある動作が過剰に行われ、何らかの状態へ到達するという意味を加える。その結果、何らかの結果を含意する動詞に生まれ変わる。具体的な結果自体は do~ によって示すことが可能である。

do 自体は、到達点を表す前置詞で、英語の gross からわかるように till の意味を持つ。一見すると、do~ の部分が、結果述語として、英語のようなものと並行性が無い様に思える。しかし、この do~ がなくとも、ロシア語の場合、do-, または, za- 動詞につくことにより、もとの動詞の表す行為の結果、それぞれ、動作

の主体、動作の対象に何らかの変化が起こったことを含意するするのである。つまり、ロシア語においては、語彙形成のレベルで、典型的に Manner/Result を Conflate させる言語であるので、Manner/Result を示す形式を新たに生み出す手段を持っていると言える。⁸⁾

その点では、英語も同じことで、英語でも、次のような文は、母語話者によれば、結果を表す表現が重複しているように感じるようである。

- (22) ?'The hunter was shooting the deer dead.

英語では、shoot には、すでに何かを銃で撃って、殺すか傷つけるという意味を含む。もし、結果を含意しないようにするためには、shoot at という形にしなければならない。shoot at であれば、単に狙って銃を発砲するという行為の段階までしか指さない。つまり、英語も、ある程度、Manner/Result を含意する言語であるといえるわけである。

英語における結果構文は、もともと結果まで含意できない動詞でも結果の意味を持たせる働きを持つ構文と言える。その点、Goldberg (1995) の考えにしたがって、結果の意味が compositional に発生するのではなく、構文自体が CAUSE の意味を付け加えるという意見を採用したい。ロシア語の do- や za- も、同じように CAUSE の意味を加える働きがあるものだと考えることが出来る。

4. 結果構文の階層

以上のデータから、次のように結果構文の分布をまとめることが出来る。

(23)

	中国語	英語	露語	タイ語	日本語	仏語
TYPE 1a	✓	✓	✓	✓	✓	?
TYPE 5	✓	✓	✓	✓	✓	—
TYPE 1b	✓	✓	✓	✓	*	*
TYPE 3	✓	✓	✓	*	*	*
TYPE 4	✓	✓	?	*	*	*
TYPE 2	✓	✓	*	*	*	*

表の縦の二重線は、STRONG Resultative を許す言語であるかどうかの境界を示す。また、横の二重線は、

STRONG Resultative と WEAK Resultative の境界を示す。表からわかることは、結果構文を許す言語には、連続性が見られるということである。また、STRONG Resultative を許す言語でも、どのタイプを許すのかが、異なっており、最も多くのタイプを許す中国語、affected な Patient であれば結果構文を許す英語、下位範疇化されていない目的語を取る STRONG Resultative を許さないが、再帰的な意味を含む非能格動詞の場合は結果構文を許容するロシア語、そして、能格自動詞では、一切結果述語を許さないタイ語となっている。STRONG Resultative でも、下位範疇化されていない目的語を取って他動詞の結果構文を作れるのは、英語しかないことになる。中国語は、実際には、V₂ の目的語であるので、V₂ 自体に下位範疇化されていると言える。⁹⁾

以上、結果構文に関して、Washio (1997) の STRONG Resultative, WEAK Resultative という区別を参考に、いくつかの言語で、結果構文がどのような分布を示すかを考察し、その結果、STRONG Resultative の中でも、さらに、細かい階層があることが明らかになった。今回の考察は、表面的な現象にのみ着目して行ったものであるので、その他の現象を考慮し、統語的な構造がどうなっているのかと言う点についても、言語間の差異を考察して比較して行く必要があるが、この点については、今後の課題としたい。

註

1) Washio は、もう一つ SPURIOUS Resultative (「見せかけ」の結果表現) という結果表現を設定している。SPURIOUS Resultative は、結果を表す部分が PR に見えるだけで、実際はそうでないものをいう。この場合、結果を表す形容詞は、副詞と交替が可能であるとしている。

i) He tied his shoelaces {tight / tightly}. (Washio, 1997, 17)

日本語の場合も、「赤く」のようなものが副詞として考えられていて、英語と日本語の PR 自体の品詞的な種類が異なる。そうなると、日本語の場合、上の「きつく結ぶ」という場合の「きつく」が SPURIOUS Resultative なのか、

WEAK Resultative なのか、曖昧となる。本稿では、Washio のいう SPURIOUS Resultative というものがあるかどうかは、考察の対象から外すこととする。

- 2) 筆者の知る限りでは、STRONG Resultative は、フランス語やイタリア語、スペイン語といったロマンス語系の言語、日本語、韓国語では、は許されないが、オランダ語、ドイツ語、英語といったゲルマン語系の言語では、STRONG Resultative が容認可能なようである。
- 3) 中国語のデータの判定は、中京大学の張勤氏に負うところが大きい。
- 4) もちろん、この場合、*kan* 「見る」は、単に直視するという意味ではなく、テレビのスイッチを入れ、テレビ番組を見るということである。
- 5) タイ語のデータは、神戸大学大学院生の Maneepong Borwonsri さんから得たものである。
- 6) タイ語の結果構文は、以上で見た様に、STRONG Resultative でも容認されるが、すべての他動詞が結果表現を取ることが出来るわけではない。Kingkarn (1999) によれば、タイ語の使役他動詞は、自動詞と同形態で交替現象を示すものと、自動詞と交替現象を示さない動詞とがあり、その内、結果表現を取ることが出来るのは、自動詞と交替現象を示さない方の動詞であるとしている。これらの交替現象を示す動詞の中には、(1) の概念イメージを持つ動詞があり、他動詞が自動詞に交替した時に inchoative, stative 読みを持つ動詞として現れるものと、stative の読みしか表さない動詞とに分けることが出来る。インフォーマントに確認したところ、後者の方は、実際には、RP を取る事が可能なようである。本稿では、データ不足なので、これ以上のことは扱わない。
- 7) ロシア語のデータは、Leiden University の Lenja Kulikov 氏から得たデータを元にしている。
- 8) ロシア語が結果的な表現を優先的に conflate せず、Manner と Result の両方を conflate する言語であることは、移動動詞の種類からもわかる。宮島 (1984) によれば、ロシア語には、「行く」のような単純に移動の方向を示す動詞がなく、*idti* 「歩いていく」、*exat'* 「乗り物で行く」のようにどのように移動したのかを言わなくてはならない。つまり、Manner と Motion を conflate しているわけである。
- 9) 英語で、下位範疇化されない結果構文を取ることが出来る一つの可能性は、英語の結果構文が、使役動詞の構文をスキーマとして、そのスキーマが拡張されているからだ考えることが可能である。この点については、別の機会に議論を譲ることにする。

参考文献

- Carrier, J. & j.Randall (1992). The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives. *Linguistic Inquiry*, 23, 173-234.
- Goldberg, A.E. (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago University Press, Chicago.
- Jackendoff, R. (1990). *Semantic Structure*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Kulikov, L. & Sumbatova, N. (1993). Through the looking-glass, and how causatives look there. In Comrie, B. & Polinsky, M. (Eds.), *Causatives and Transitivity*. John Benjamins, Amsterdam.
- Levin, B. (1993). *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago University Press.
- Levin, B. & Rappaport Hovav, M. (1995). *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantic Interface*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Napoli, D.J. (1992). Secondary Resultative Predicates in Italian. *Journal of Linguistics*, 28, 53-90.
- Talmy, L. (1985). Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms. In Shopen, T. (Ed.), *Language Typology and Syntactic Description: Grammatical Categories and the Lexicon*, VOL 3. Cambridge University Press, Cambridge.
- Thepkanjana, K. (in press). Lexical Causative in Thai. In Van der Lerk, F. & Foolan, A (Eds.), *Constructions in Cognitive Linguistics*, John Benjamins, Amsterdam.
- Washio, R. (1997). Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics*, 6, 1-49.
- Yong, S. (1997). The grammatical functions of verb complements in Mandarin Chinese. *Linguistics*, 35, 1-25.
- 影山太郎. (1996). 『動詞意味論－言語と認知の接点－』日英語対照研究シリーズ (5). くろしお出版.
- 宮島達夫. (1984). 「日本語とヨーロッパ語の移動動詞」『金田一春彦博士古希記念論文集』, 国語学会編, 三省堂, 東京.
- 鷺尾龍一. (1997). 「他動性とヴォイスの体系」鷺尾龍一・見原健一著, 『ヴォイスとアスペクト』, chap. 1, pp. 2-106. 研究者出版, 東京.

(1998年12月1日 受理)